

感染防止へ ごみ袋エプロン

流山のボランティア団体 週1回集い製作

流山市のボランティアサークル「ディスプレイ型エプロン応援団」のメンバーが、ごみ袋を活用した使い捨てエプロン作りに励んでいる。新型コロナウイルスの感染拡大で入手が難しくなっているエプロンを、訪問介護や看護の現場で働く人たちに届けたい。医療機関での利用に目が向けられがちだが、「人の命を預かる仕事は介護も同じ」と協力を惜しまない。



ごみ袋を活用した使い捨てエプロンを試着するボランティアのメンバー。左端が代表の坂梨孝一さん。いずれも流山市

訪問介護や看護事業所にお届け

同市向小金の「東自治会館」。6月26日夕、近所の女性6人が2人ずつ3組に分かれて、45リットル容量のポリエチレン製ごみ袋をエプロンに仕立て上げていく。全員が70代で、使うのはハサミだけだ。

1組は袋の口から両脇を切り開く。受け取った別の1組が頭を通す穴を開け、両縁を腰ひもになるように切る。最後の1組が折りたんで10枚ずつを袋詰めにして完成。この間、10分足らずの作業だ。リーダー役の西川桂子さん(74)は「この時期ですから、何か社会に貢献できないかと思って」と話した。週1回ほど集まっては約1時間半かけて、その都度、100枚を仕上げてきた。

同応援団がスタートした

のは4月下旬。地区の東自治会役員をする坂梨孝一さん(68)が呼びかけた。坂梨さんはセンサーシステムの開発製造会社を経営している。仕事先の訪問介護事業所や訪問看護事業所の職員から、「コロナの感染防止で使い捨てエプロンが必要なのに、なかなか手に入らない」と窮状を聞かされたのがきっかけ。

使い捨てエプロンは業務用がほとんど。業者やインターネットを通じて購入するが、コロナ禍の影響で医療機関が優先されがちだ。介護関係者は入手難に頭を痛めていた。

坂梨さんは製作が比較的簡単と知り、市販のごみ袋千枚を自費で購入し、地区の住民たちに協力を呼びかけた。会員になっている流山商工会議所も900枚を提供した。当初は事業所に寄贈していたが、「無料で

は申し訳ない」と1枚10円で購入してくれるようになった。1枚当たり4円の利益は、さらに袋の購入費に充てている。

現在、ボランティアは約40人。70〜80代の女性が中心で男性は坂梨さんを含め2人だ。製作場所は自治会館のほか、多くはそれぞれの自宅。完成したエプロンは市内8カ所の訪問介護、看護事業所に配布している。その数は約2カ月間で4500枚になった。

橋渡し役は同市社会福祉協議会だ。市内には訪問事業所約40カ所のほか、複数のデイケア施設もある。直井英樹事務局長は「職員は入浴などで利用者の体に直接触れる機会が多い。感染のリスクは医療機関に劣らない」と強調する。「この事業所も使い捨てエプロンは必要。ごみ袋の寄付があれば応援団も助かるでしょう」と話す。



ハサミだけで製作できる使い捨てエプロン。袋を1枚に広げて2本のひもと頭を通す穴を作れば完成

坂梨さんは「営利を目的にやっているわけではないが、困っている事業者があれば協力したい」と話している。問い合わせは、同市社会福祉協議会(04・7159・4735)。(青柳正悟)